

2024年2月4日 青戸教会 「癒すキリスト」

聖書 ヨブ記23章1〜10節、ヨハネ福音書5章1〜18節、高橋克樹牧師

1節を見ると、「ユダヤ人の祭りがあったので」とあります。この祭りは、過越しの祭りのことで、この祭りにはたくさんユダヤ人が神殿を訪れます。イエスは過ぎ越しの祭りの際にエルサレムに入ったのです。その時に「羊の門」と呼ばれる門から入場したのですが、その羊の門の傍らに、ベトサダと呼ばれる小さな池があって、そこを取り囲むように5つの回廊があって、その回廊には病氣の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが大勢横たわっていたわけです。回廊とは屋根がついている廊下のことですが、その回廊が池を囲むように、張り巡らされていたのです。

なぜ、体の不自由な人たちが大勢その回廊にいたのかと言うと、池の水が動いたときに、最初に池に入ることが出来たら、病氣が癒されるので、その時を体の不自由な人たちがかたずを飲んで待っていたからです。聖書本文を読むと、4節が抜けていることがわかります。212頁を見ると、その本文の欠けた文章が載っています。「彼らは、水が動くのを待っていた。それは、主の使いがときどき池に降りて来て、水が動くことがあり、水が動いた時、真つ先に水に入る者は、どんな病氣にかかっているか、いやされたからである」という一文が底本に欠けていると判断されているので、聖書の本文には訳出されていないのです。この欠けた文章を載せている写本もあるのですが、それは後の時代に写本をする際に、意味がよく通るように書き加えた文章であり、本来のヨハネ福音書の本文にはないものと聖書の本文研究者によって判断されているからです。

さて、イエスがその大勢の人たちの中で、38年間も病氣で苦しんでいた人に「良くなりたか」と尋ねたのです。その病氣の人は答えます。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです」と言って、自分を助けてくれる人がいないために、自分の病氣がまだ治っていないことを告げたのです。¹

そこで、イエスは起き上がって、床を担いで歩きなさいと命じたのです。以前に親族か誰かに床に載せられてベトサダの池に連れてこられたのでしょうか。イエスはその床を担いで歩くように命じられたのです。自分が載せられてきた床を担いで歩くことができたということは、癒された状態が完全に治ったことを表しています。よばよば歩くような状態ではなくて完全に治ったことがここで強調されているのです。

ところが、ここで一つの問題が浮上してきます。この癒しの業が起こったときに安息日であったことで、床を担いで歩くことを労働とみなしたユダヤ人たちが「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」と、その癒された人を糾弾したのです。そこで、その人は「わたしをいやしてくださった方が『床を担いで歩きなさい』と言われたのです」と答えたのです。けれども、その癒された人は自分を癒した人がイエスであることを知らなかったのです。その後、この人が神殿の境内でイエスに出会ったことで、自分を癒した人物がイエスだということがわかり、ユダヤ人たちにその事実を告げたのでした。こうして、イエスに対するユダヤ人たちの迫害が起こった経緯が明らかにされたのです。さらには、ユダヤ人たちがイエスを迫害するもう一つの理由が18節に書いてあって、イエスが安息日の規定を破るだけでなく、神ヤハウエを御自分の父と呼んで、イエスがご自分を神ヤハウエと同等の存在だと言ったことが迫害を受ける根拠になったことが記されているのです。

このようにイエスがエルサレム神殿でなぜ迫害を受けることになったのかという理由がここで明らかにされているのですが、その経緯がベトサダの池で病氣の人を癒したことがきっかけでイエスへの迫害が起こったということに、違和感を覚える方もいると思います。他人に対する善意で行った癒しの行為が

自分を追い詰めていく原因になってしまおうということにやりきれない思いを抱く方もいると思います。しかし、このような理不尽なことはイエスに限ったことではありません。私たちの日常においても、しばしば起こることです。善意から行ったことが思わぬ結果を招いてしまって、釈然としない思いになることがあります。そういうことが起こった時、なぜ善意が誤解を受けてしまったのか。あるいは、善意で行った行為が人を傷つけてしまう結果になったときなど、私たちの生きている世界ではしばしば起こることです。

けれども、考えてみれば、イエスが最初にかけて「良くなりたいか」という言葉は、ある意味無頓着なものです。38年間も病気で悩んでいた人物に「良くなりたいか」と尋ねること自体、おかしなことです。そういう質問を投げかける必要などないほど、治りたい感情を改めて問われても本人にとっては、そんなこと聞かれるまでもない当たり前のことだと思っただことでしょう。

病気で長い間苦しんでいた人間に、「良くなりたいか」と問うことは、なんとも失礼な言葉です。無神経で残酷な言葉です。「そんなことあたりまえだ」と言い返されてもおかしくない言葉です。イエスはあえてこのような言葉がけをしました。それはこの病人が本心から治りたいという気持ちを持っているかを確かめたのです。彼の心は、肉体と同様に病んでいたのです。サーカスで行われていた動物に芸を教え込む際の基本は、幼い時にできないことを徹底して教え込むことです。サーカスは地方都市を巡回して、大きなテントを張ってお客を入れるのですが、移動をするので、動物が移動途中で逃げ出すことがあつてはならないのです。ですから、例えば象は小さい時に杭につながれておいて、絶対に引き抜けない体験をさせておくのです。すると、杭につながれた段階で杭から逃れることを諦めてしまうのです。そのような幼い時の経験則が大人になっても、杭につながれることで逃げるような気持ちを抱くことがなくなるのです。

動物の虐待と同一にするのはやや申し訳ない気持ちになりますが、38年間も病気で治る見込みがない中で、彼はあきらめの気持ちに支配されていたと思われれます。そういう呪縛に囚われている人間に対して、「良くなりたいか」と問うたイエスの言葉によって、彼の諦めの気持ちが改めて問われ直したのです。そうだ、自分は治りたい気持ちを抱いて、このベトサダの池に来たのだということをおい出させたのです。ですから、7節にあるように、「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、他の人が先に降りて行くのです」と、自分の置かれてきた状況を言い訳のように言っています。そういうことを説明しなくても、おそらくベトサダの池にまつわる癒しの話は多くの人が知っていたことでしょう。それにも関わらず、この男性は自分のことを池の中に連れていってくれる人がいないことを言い訳のようにイエスに話しているのです。

けれども、イエスは体だけでなく心までも治りたいという気持ちを見失っていたこの男の人に「良くなりたいたいという願いを本当に持っているのか」と問うているのです。私たちの日常生活でも、この男性と同じようなことが起こります。若かりしときに、自分の人生に夢や希望を持っていたにもかかわらず、歳をとってからは何も変わらないこととして、以前抱いていた夢や希望を諦めかけている。あるいは、信仰をもって洗礼を受けたにもかかわらず、いつしか祈りながら、現状は何も変わらないと諦めつつ、形式的に祈りをなしているということが、ありはしないか。信仰を持った当時は伝道に熱心だったが、自分の生活で忙しく過ごしているうちに、他人の無関心によって伝道の熱が冷めてしまったところがないのだろうか、自分自身を真実振り返って必要だということをやり過ぎしてはいないか。けれども、イエスはそのような諦めの気持ちに陥っている私たちを呼びだしてくださるのです。そのような呼び出しを受けて言えることを、癒されたこの男性と共に、主イエス・キリストに応答していきたいと思うのです。